

911.3
才
乾

溫故集

序

さうふとて入つてゐるやうにと
はつたふしもあるやうにと
れはつてゐるやうにと
はつたふしもあるやうにと
はつたふしもあるやうにと
はつたふしもあるやうにと
はつたふしもあるやうにと
はつたふしもあるやうにと
はつたふしもあるやうにと
はつたふしもあるやうにと



わたりしうゑも花は春月ハツ出やり
はる未採の人のあふ花は春の句所
を風流もさる所のさうさうさうさや
しやちのあ句とのあむ車は春の
連寄とていふも俳偖はいふはるる
うてはるるやちの人のあむ不意の
かああしん九はるのあて天下よ
参るはる人ともさる家燈も武の
あひし句所のあむのあむさあむに

又和寄の風情もはるはる和寄とあひ
はるはるのあむさるさる俳偖の
連寄とていふ所のあむさるすて
さるはるのあむさるさるさる
とてはる君の代のあむさるはるのあむ
あむもさるも俳偖もいふはるのあむ
さるはるはるはるはるはるはるの
あむはるはるはるはるはるはるの
其はあむはるもさるはるはるはる

一 花の舞 文宝

花の舞 文宝

花の舞 文宝

花の舞 文宝

花の舞 文宝

花の舞 文宝

花の舞 文宝

花の舞 文宝

花の舞 文宝

花の舞 文宝

花の舞 文宝

花の舞 文宝

俳諧温故集之上

東武 雷風菴蓮谷選

四序混雜

花の舞 文宝

花の舞 文宝

花の舞 文宝

花の舞 文宝

西三條實澄卿

山崎と柳とにうゑる庭のうゑ

是田の監よりきこるよ

近衛殿下侍尋公

おもしろくもなれ又はの者

又佐ゑ武よりし

鳥丸大納言光廣卿

名ふりくもく一毛ハ初き次

清ふも鳥とけり立花 西武

鳥丸大納言光廣卿

親くは新あり源一枇杷の枝

又佐ゑ朝とけり

同

うらとあてふくねと一の音

同

太閤秀吉公

小田原やあまののうらああせ

八幡太郎源義家

乳をこぼさるる角力するものなり

文治の夏の秋恭愍を征伐の時

右大將源頼朝卿

新秋よりふの軍より名を川

有秋は春のよりなり親の

敵を新よりとあらはれ

あらはれ

畠山庄司重忠

畠山やあらはれしものなり

太閤秀吉公

柴田より細川よりなり

細川玄吉法印

きつはらしものなり

小堀氏宗甫

冬より春の先徳

ふ早形城全戦の時

長崎九郎左衛門師宗

はらわけてかつた色えせよ山楊

秀吉公の鮮浄陣の時

深水三河守入道宗甫

わうくちのわうくち其すくきくくわうわう

寛永五年盛法院より

細川玄吉法印

法世うわうくちのわうくち

同

よりわうくちのわうくち

羅山子林道春

きくわうくちのわうくち

慶安と改えあり

半井ト兼法眼

改安のわうくちのわうくち

旧年五万ふとあり

西岸寺任口上人

よりわうくちのわうくち

然則（？）のやうにせうふ
くしのやうにふふ

鴨長明法師

くしのやうにふふ

紫野一休和尚

目うふやお月八日お花うへ

深草元政上人

梅乃花はるやうにふふ

東海寺沢菴和尚

ふむれとふふはるやうにふふ

紫野一休和尚

紫野のふふはるやうにふふ

松花堂昭乗

紫野のふふはるやうにふふ

高野山楚仙上人

はるのふふはるやうにふふ

我園めく

紫野一休和尚

ふふのふふはるやうにふふ

愚道和尚

大ぬくのききあつてもや梅子

西岸寺任口上人

もろなほあふれて炭俵

同

正三位長官常和

もろ水をはや思井の庵へ

宗祇法師

そのれあふのきひて物き

心散僧都

九ツの品川ききえ蓮う那

あきの吟

牡丹花肖拍

えいふやあのをのねんえ

宗長法師

梅のききえられて藤あふ

櫻井元佐

あはれなる御心よみてもうきう

宗頼法師

あまの神あはれて河の天の川

救育法師

あまの市原やけのつまこめ生主神

むの都乃うきうを

千利休

あまの山きくおよむもの

里村法橋紹也

あまの花もあはれうきう

狩野常信

あまのうきうをうきう

瀬戸藤四郎春慶

あまのあはれうきう

あまのうきう

千利休

あまのうきうをうきう

そらり新左衛門

祇軍舎や鈴義すちく川の山

蜷川新右衛門親當

も芥るの命帯すむるうた那

春の部

歳旦

元朝や非代のりもあまのり
守武

元日の見るものせん不二の山
宗鑑

鳳凰もやものもききりの年
貞徳

去来といふやえはのわたり縄
立圃

我等或り有るも来りやと朝のま
貞室

去来といふやえはのわたり縄
望一

元日やぬぐふものも来りや
重頼

耕りての年の終りて試み
西武

初夢やあり餘るはく金瓶花	令徳
万歳やあやうとすも戀のま	梅盛
面とやとれも眠くや日のほしめ	安静
歩ゆる真名の一月やと都のま	徳元
あうめてと下のまやまのしと今	玄札
とれよとやする代をうとてはま	季吟
新妻のちまゐるちまゐるま	宗因
あやうやうとるむるちの春	未得

雞旦

元日は田毎の日とてとひもれ	芭蕉
深利をうけはなせし山おま	調和 古
とるゝぬきもあやみれのみ	幽山
うとあやう牧合和玉のみ	不卜
門松や燈籠あうも老る者	舉白
ふとあやうわたりてと都の春	休甫
我急の松竹もはるる川	西鶴

元日やさねと那川のふれも	来山
條のうへよりけり終りぬ後も	山夕
終ひより責め日にもあはれぬ春	其角
元朝や曉て雀のあはれ	嵐雪
遊み來の杜屋より通ふ花の都	鬼貫
初日より花よりわやうかみ山	一晶
秋のふの二と採るなり傍作	無倫
初よりや船のきもりの貢也	露言
わへは玉もくもくそり春	神叔

後より勝も彩ありむの春	似船
初よりや推すりきも鞠の言	介我
元日のきやぬみはきりり	沾徳
七十歳のふとと連ひて	

兼好の死ありといふよむの春	支考
きねり親のきりぬるきふり	野坡
極座よりきとすつてけけの春	沾洲
後保作やきねの帝をきね	青城
いの水やき月もききりり	貞作

リ灯ふ赤子の面やむのま 百里
 え日やわすれの中れ新く脚 琴風
 も燈の明き式重帝明のま 専吟
 ま浦や車のまよふ舟のま 超波
 ん重傷やまよふまよふ松の春 珪琳
 ん水や老とまよふまよふ井の し由

年序

雀ふあしとの面や清兼 柝居
 竹馬や秋まよふまよふ 蓮谷
 下馬や神を帆うてりま 餅夢
 柳影やまよふ日比のま 菊輔
 あ町田まよふまよふ 瓢斗
 ままよふまよふ小町のま 蓮谷
 浦島やまよふまよふ 同

剛女

万のまやまよふまよふ 黒露

人日

七三
あや
ゆき
りく
しん
けい
の
う

其角

一、とや な ゆ る は な

無倫

ちよやのちよのちよ

挑
隣

是は、いふに及ばず

蓮谷

大田の御紀

超波

梅

唯此の兄と兄の兄弟と

望

[illegible]

其角

梅干と足如く片う梅の皮

嵐雪

鶯焼
そありめし
やむめの花

秀和

山雲とてあはれなる梅乃也

竹亭

卓毛より床までさかすか梅のむ

負佐

梅子や二三人はこれ

沾洲

後明下五方て肩車

珪琳

氣のこゝろ入れ替へて扱へる事

園女

梅よりあめきさうな指より

蓮谷

三、月や梅のちよきそけのふ

山
父

柳

投入ささく白き柳の都 春澄

春風と哭きさる柳の都 不卜

入おの夢と見ゆる柳の都 調和

夢に上てあかす柳の都 才誓

春風と涙を流さる柳の都 乙由

柳の都のささくさる柳の都 貞佐

三日月とゆくささくさる柳の都 助叟

淀の波へる声とさる柳の都 青峨

春風の賑りさる柳の都 零風

まどろこく馬のあゝの柳の都 立隠

美事とあかす柳の都 一漁

八九と定てさる柳の都 芭蕉

ま柳とあかす柳の都 珪琳

下くのさる柳の都 成屋

猿のちうりさる柳の都 蓮谷

ま柳とあかす柳の都 柳居

鷺

鷺の羽の白くはるかに	文宝
鷺の羽の白くはるかに	文宝
鷺の羽の白くはるかに	文宝
鷺の羽の白くはるかに	文宝
鷺の羽の白くはるかに	文宝
鷺の羽の白くはるかに	文宝

野老

野老の杖の白くはるかに	文宝
野老の杖の白くはるかに	文宝

野老の杖の白くはるかに
野老の杖の白くはるかに
野老の杖の白くはるかに
野老の杖の白くはるかに
野老の杖の白くはるかに

野老の杖の白くはるかに	文宝
野老の杖の白くはるかに	文宝

和歌

うづまやまの	新少む素浪人	旧酒
初しやう	いせうそくはけ	欠代
はつまや	狸むい	白雲
初まや	歌まの	新波
うづまや	掛ま	仲乃
		北洲

乙鳥

はつまや 何ま 乙鳥 乙由

乙鳥	や	はつま	の	波	を	は	く	喰	欠代
立	後	ま	や	う	り	刻	て	漢	う
世	の	年	能	換	幅	あ	し	う	柳

猫歌

出	て	三	日	人	あ	り	い	う	の	猫	の	歌	欠代
猫	の	意	猫	つ	も	う	す	と	整	う	琴	風	
後	人	の	板	も	入	や	猫	の	意	洒	堂		

彼岸

精進をいふこと一親の徳を
 来山
 けりて徳をいふは徳の徳を
 支考
 杖つて徳をいふは徳の徳を
 蓮花
 板とて徳をいふは徳の徳を
 板波

苗代

苗代をいふこと一親の徳を
 才磨
 おりて徳をいふは徳の徳を
 言四
 志は徳をいふは徳の徳を
 蓮花
 苗代をいふは徳の徳を
 又英

椿

山川へ徳をいふは徳の徳を
 素堂
 徳をいふは徳の徳を
 言光
 徳をいふは徳の徳を
 貞徳
 徳をいふは徳の徳を
 蓮花
 徳をいふは徳の徳を
 挑陟

蝶

花をいふは徳の徳を
 吉武

り給の是と云ふる相傳は 不卜
地は比き若おむと云ふ
ゆきふと云ふと云ふと云ふ
あつやあられ小蝶の初木 欠代

蛙

ふとついであつと云ふ地う那 宗鑑
附あふのふと云ふと云ふと云ふ 玉戔
日と云ふと云ふと云ふと云ふ 玉戔

上京吟

井筒う都えと云ふ地う那 蓮若
あつと云ふと云ふと云ふと云ふ 宗鑑
あつと云ふと云ふと云ふと云ふ 蓮若
あつと云ふと云ふと云ふと云ふ 馬光

蛙二十章

神祇

あつと云ふと云ふと云ふと云ふ 貞佐

尺教

梅よりへ唱てよるに性なり 同

五

而これを目してけあす性なり 同

す常

多る此の性ばかり比のかつなり 同

武士

整美なりとあつて一に濁る性なり 同

農人

小田性歟のやうにとのれなり 同

職人

筆法のはり今うなる性なり 同

町人

舟のちりき性なり 同

喜

而性なり産家の極れ下 同

怒

多るなり性なり 同

哀

あふのけふは 旅次のはて 可なり 同

樂

あふのけふは 旅次のはて 可なり 同

生

山城へ 出かゝりて 居るは 同

死

あふのけふは 旅次のはて 可なり 同

昼

あふのけふは 旅次のはて 可なり 同

夜

あふのけふは 旅次のはて 可なり 同

晴天

あふのけふは 旅次のはて 可なり 同

雨天

あふのけふは 旅次のはて 可なり 同

會者

あふのけふは 旅次のはて 可なり 同

定離

願當之月所望極之

同

土筆

宗論やまの道は

聖王の道は

安んずるは

武義の道は

朝豊

貞佐

沾洲

東潮

離

東山の水は

貞佐

南門の水は

超波

雙蓮の水は

蓮谷

人言を離るるは

其角

紙羅の水は

白雲

以干

常流に川は

沾徳

観心も平目

其角

以干てや 燻るゝものゝ不ニナリ 欠代
りふゝるゝ 是感ぬき 撫る以干に 宗瑞

寒食

多食や 物産より火と焚火 奉白
多食や 其日よあてる 佛 立吟
多食や いふにたふすあふ 零風

出代

出かりや あふれさるゝあふれ 嵐雪
出かりや あふれさるゝあふれ 雨ん
出かりや 人の心もあふれ 瑞珠

楊

口癖よ せよ 於安 山さるゝ 無倫
只の時も 花をば 花の楊 西鶴
遠にさる 楊の版川 山さる 信徳
見楊さる 花や 文殊より人 西武

式花御ふ人りあてる楊柳
 立吟
 名のはぬふくゆ 山はく
 源去
 入おのまゝと深み楊柳の柳
 言水
 ちるづく柳のこゝろくさく
 自悦

上京の時ふはあまの
すく

け地とハニ階へあたる楊柳
 欠代
 りりおの柳のふくさく楊柳
 智目
 楊柳ありさくハ楊柳ちる金点
 狂舞
 そもふハ柳のふくさく楊柳
 秋色

ふきのちくさく足あつて豆腐賣
 若くは
 ふきとふくさく人や山はく
 蓮若

月移花影上欄干

見かけのひさ極うもる楊柳
 不ト
 遠くさあまの人のさくさく
 國女
 世の中とさくさく楊柳
 信徳

花

花のちくさくさくさく
 信徳

玄修——都のむよ目と心 泰徳
えれ——人のまねのむさう 立圃

菩提山あり

ちる花をさふに河原院佛たみか 守武
櫻のふりむもわすれぬすうとふ 芭蕉
花咲て死すもなむに物うと 来山

うしあふと

ちる花をさふに河原院佛たみか 古 盤谷

そのむら——うしあふと花をさふて
詩う花うとや日のうしあふと花うと
花うと花うと——のむさうと花うと
まもやうと花うと花うと花うと
うしあふと花うと花うと花うと
あうと花うと花うと花うと花うと
あうと花うと花うと花うと花うと
あうと花うと花うと花うと花うと
あうと花うと花うと花うと花うと

高松ありては隠士を招き
いつちへりしよりよきあり

我よりともありぬれものも
未 陌

東海より

禪さへも帰すなりなり
重 頼

もの思ふなりなり
やういふなりなり
さういふなりなり
さういふなりなり

さういふなりなり
貞 室

小な路なりなり
来 山

さういふなりなり
嵐 雪

さういふなりなり
立 園

さういふなりなり
水 田

尼より
を泰より

さういふなりなり
すて

さういふなりなり
琴 風

さういふなりなり
瓢 斗

蓮谷亭より
三井より

竜宮よりなりなり
負 佐

うへへいなりなり
加 友

北滕

持ちよふ所のよりや花のど
 柳花や横うゝる所の天の川
 加、あゝ
 貞佐

牡丹の歳旦五章

あやうかくとせん 腰竹
空引ハ塙の惣ふねぬるや 素
咎痛や引ふあやこの明のま 包
あやふかしきまのまひ 袂

みせやうに
ゆ粉ふり
て明の玉
童

春

中丸抄とあり去日抄 宗鑑

千尋の足より此
日の爲
貞室

海素や嚙てちるを却て眠り
重頼

あゝ雲のわさか
今と新あゝ
舉白

源川の如く
一 日

又の由り皆口よりなる
 塹うゑ
 右
 立志

判るゝ布衣名ハはむ 宝船 起波

血気やふるはりて波ぬく 担風

東茶屋へ置く歌けり中 負作

あつ海のいれる時りみけサササ 専吟

神卜のあつるまき山ハはしる 浮生

三月とる麻てくりに二月外 秋風

むの髪ふへるまき二月外 支考

糸やうのあけらるるまき外 隆平

山吹やうのまきまきと別の上 三河白雪

あつあんと介山のなげらるるまき 幽山

むきくはるまきつるまき 崇徳

玉依子傳説と唱へるあつ孔は

臨るあつ 臨るあつ 俗あつ 次

かの舟人玉依子と名を玉と

あつて市を賣くまきり

しる思ふまきとる 齋僧の齋

のまきとるまき 句はるまき

雉子乃毛と豆腐と 杵るまき 才替

あゝ人の世なりとて

猫のふきあつては

やうなうのふき

死にたるふき

か

心へふきあつての猫のふき

おはつてかきあつて

ふきあつては

猫のふきあつては人の愛 沾徳

卯杖とては猫の書 ト史

まゝやとては猫の書 ト史

猫のふきあつては 蓮

「山」のふきあつては 蓮

日光へり

雀もふきあつては 蓮

蛭子贗

祓代よりたかたき 祓代

夏の部

衣更

一とらふ給ふるやまふ衣 其角
衣ふもふの須戸の粘るも 貞作

常々さうく

衣かへらふ織ぬ罪ふり

園如

出女の夕日ふあつて給ふ那 塵匠
衣給ふまふかられり衣ふ 西鶴
衣給ふのえり給ふまふや 芭蕉

郭公

お月さへ給ふまふ郭公 宗鑑
さへおの月の鳴さうれい 藻風
鳴さへ給ふまふ郭公 光貞
郭公はさへ給ふまふ郭公 調和

牡丹

親王とていふは人の参りて
 立圃
 眠る様をいふは牡丹の
 来山
 大なる花をいふは牡丹の
 専吟
 花とていふは人の参りて
 専吟
 蓮谷
 生貝の耳とていふは人の
 貞佐
 入るる人といふは牡丹の
 専吟
 あらう人の参りていふは牡丹の
 専吟

鯉

鯉の魚といふは人の参りて
 周竹
 高の魚といふは人の参りて
 貞佐
 長魚といふは人の参りて
 超波

戸

戸の魚といふは人の参りて
 英
 一蝶
 我々の魚といふは人の参りて
 言水
 目とていふは人の参りて
 素堂
 人の参りていふは人の参りて
 其角

短夜

みしう夜のみま乃ちあや横の沢 空存
寝あはるもつあのみま寐り 一品

重五

夕田をたのまどわを玉を糍のち 言水
定はるのちの櫓とハ横の那 貞作
懺う風とあまのちや藤ね懺 玉芝
あやうくはひらけのち 百里

五月雨

さしあや傘のち小人形 其角
み月あやあまのち波淀の人 鞭石
はみあやあてあまのち傘下 超波
み月あや月も星もあまのち 黒露
み月あや鏡も夜のあまのち 瓢斗
服部の下性屋やみ月あ 蓮谷
み月あのかみやや寝の隅りや 立吟
み月あのかみやや寝の隅りや 貞室

夏の草

梅の咲くときや見ゆ

夏は

あゝ夏のあゝで咲く

吾仲

はるやと秋のあゝ

し由

昔のやと夏のあゝ

歌ふ

さやふの墓より

さやふの墓より

久代

散る時のあゝ

故人

かゝるあゝ

あ武

开花

うのむやいつきのあゝ

き海

卯の花や日光とあゝ

百里

耳のむやもあゝ

白雲

うのむやもあゝ

古

田植

あゝやあゝ

桑拾

あゝやあゝ

言ふ

あまのりつゝの田つゝる 不ト
 りさやふゝゝゝゝゝゝゝ 来山
 あまのりつゝゝゝゝゝゝ 菊
 りさやふゝゝゝゝゝゝゝ 隆平
 りさやふゝゝゝゝゝゝゝ 弘政
 りさやふゝゝゝゝゝゝゝ 乙由

蚊

蚊もふなりゝゝゝゝゝゝゝ 貞代

避蚊辞

宗因述

りさやふゝゝゝゝゝゝゝ
 りさやふゝゝゝゝゝゝゝ
 りさやふゝゝゝゝゝゝゝ
 りさやふゝゝゝゝゝゝゝ
 りさやふゝゝゝゝゝゝゝ
 りさやふゝゝゝゝゝゝゝ
 りさやふゝゝゝゝゝゝゝ
 りさやふゝゝゝゝゝゝゝ
 りさやふゝゝゝゝゝゝゝ
 りさやふゝゝゝゝゝゝゝ
 りさやふゝゝゝゝゝゝゝ

りさやふゝゝゝゝゝゝゝ 宗因

あふくをかばうの田

あふくをかばうの田

あふくをかばうの田

あふくをかばうの田

唐の詩も詩人をもて
我の心も〜るの心
美人の情も〜るの心
瘦く柳も〜る

風の心も詩人をもて
人妻の心も〜るの心
〜るの心も〜るの心
む〜るの心も〜るの心
神の心も〜るの心
友の心も〜るの心

面影の心も〜るの心
か〜るの心も〜るの心
〜るの心も〜るの心
〜るの心も〜るの心

蝸牛

猫の心も詩人をもて
〜るの心も〜るの心
〜るの心も〜るの心
〜るの心も〜るの心
〜るの心も〜るの心
〜るの心も〜るの心

螢

強力のとも出たるはるるを 春洗
其角

を国言とて

秋らうしゝ代はなを 留帯 一映
其角

河川の言もとの世に

かゝるる金銭なりしを 飛雪 許六
其角

通ふに路中より包む帯の那 狐皮
跡足のとるはるるの言なり 蓬若
愚らうとく棘とはるる言なり 蓬若

鴉船

鴉船のよるき人の月より 俵田
あやうとてねてゐる言なり 蓬若
石新菟也やと語り鴉船 其角
あやうとてゐる言なり 俵田
松明の消えてぬる言なり 蓬若

虫十

蟬をてはくんききん土用干 去来

蟬干や一巻を通り宇津の山 負作

蟬干や心の後にはかくとも 百里

蟬干や足ぬ世の白ひ糸をい 蓮谷

蟬人や木をよかけて土用干 キ用

蟬

蟬をてはくんききん土用干 芭蕉

蟬干や一巻を通り宇津の山 西武

蟬干の心はくんききん土用干 壯国

蟬干や一巻を通り宇津の山 其角

暑

暑入のころあつた暑く 珪琳

暑のころあつた暑く 正秀

暑のころあつた暑く 貞佐

花女の歌

川竹のあつた暑く 起波

夕飯はいやと鼻あうる者なり
 負ふもよ髪なりしとあつさる
 移るもなほし物なりとあつさる
 暑の物柳の枝なりとあつさる
 寝あけし元也も人の暑なり
 りあつさる膝をぬくも暑なり

狂琳
 園女
 其蒼
 安士
 蓮女
 宗瑞

納涼

切符の字条へはく涼の南

狂琳

あひるも送るもあり夕涼

涼く門て留るする夕涼

狂琳

あけな

ほのや鬼あふるも夕涼

もさつ実のちり人の涼

もさつ鼻せて火室のちり涼

狂琳

扇

去人の紋よりけする扇

尚白

夏非りちううまふいふ
授雲は花の香しあふ
かゝる月ハ中へぬまふ
徳琳 佳雅 望月

清水

日比りの暑より後さ清あり
楊梅の落てまふく清水を
石佛たゝまあしあふ
あふの流きて通るはあふ
常牧 未陌 一品 花兮

蓮

そりや蓮よりあて居心
六月の地獄よりさく蓮の那
蓮のまやけと林の山斗
小力の罪おほく蓮の角
聲のまろりさあふと蓮は
淑美 蓮琳 欠代 曉而 又美

白雨

ゆふさふふあふあふあふ
不卜

ふきの花

夕ぐしや田どよめけりのかたけ キ田
ゆめまや牛のやと乃柿庵 玉塙
とちや泣きあふもぬき日中 蓮花
夕立やさもあふ人の腕 雪吹
あふさやふゆをかふる傀儡師 キ田

夏

雪月花つふさるる月 欠田
吹れの花さうりりまぬ 雪吹

乞食の天地をまぐる キ田
かふるあはる根乃あそむ 欠田
まけやあふのかよ 一田
月輝や松系あへいる山 田田

蟻織るて

ひぐらしのやもあふる 一田
灌佛や乳ハき 乙由
めつとや入梅の中 晚山
八と泉や泣きあふ キ田

毎人のそこのよきや美の風	あけ
むくくむくやうにうめ山椒	吹市
あつ純の温公くやあふれ	旅波
かきこめや雲のふと移るて	似春
あともふたもすくうや月や	陸珠
竹のふやうな縁のう矢の枝不	き細
鬼野や星のふやうの風をちき	欠代
あふ月やあふれ風をちき	志
い裏の有常ととも相のむ	冠里
	素堂

風辨

嵐雪述

ちうあふれをいふちうて襟のふくくは
 流るる服粒のふくくはものけすりあてり
 るくあふれふれ解け解け月鏡ふれふれ
 きて集るうめを何ひふるよふき風あ
 き腸呼吸ふつきて動揺ゆくすふと
 きくくくくくくくくくくくくくくく
 怒けたるる護下堂くくくくくくくく

百由旬より雖鯨の隅細なるやうな
 ひらきつて憎愛かりつるやうな
 えゆれ月程のおちりる聖りのちぢの
 光りふしあふみかたつとつるよあの
 化のうあふよりきるとして知識の肌は
 訓ゆゑひてほとねしつとつとつと
 けりしき月影や柱の光る生とて
 かつて旧年のあふ人よと執めよと
 あれきやうくつとつとつとつとつと

知れりし陰をた地獄すくもつちと
 するよあふくつとあけてんきんあふ
 つとつとつとあふくつとつとつと
 測るあふあふし人のあふてふあふ
 てふつとあふとつとあふとつとあふ
 光るよあふみ果ぬ白きあふとつと
 ものり

題風

風をたふさる
 芭蕉

露をくくし寒の常なるを
 其角
 露をくくし寒の常なるを
 才
 露をくくし寒の常なるを
 尚白
 露をくくし寒の常なるを
 沿洲
 露をくくし寒の常なるを
 零風
 露をくくし寒の常なるを
 濟通
 露をくくし寒の常なるを
 序令
 露をくくし寒の常なるを
 百里

又虫

不二の山をくくし寒の常なるを
 芭蕉
 不二の山をくくし寒の常なるを
 才
 不二の山をくくし寒の常なるを
 嵐雪
 不二の山をくくし寒の常なるを
 尚白
 不二の山をくくし寒の常なるを
 百里

享保己酉の年
 南粵よりあふり
 名を日中へり
 同くあり
 泰平よりきこ
 ありて名をきこ
 ありて名をきこ

天竺の常なるをくくし寒の常なるを
 沿洲

1610
 3. 14
 36

今や幾不二のありしのかうなり	るはくは紙帳と象のさやうえ	面ういと牙も海も小はる系	その鼻てかゝるへいいうるを花葉	ふの波の星はかやう	ありありや海も象の象はしき
京 仙鶴	泰室	超波	蓮谷	蓮之	貞作

乾のまきおきりなりきりある月
 江戸書林
 源六

